

肝細胞癌は、肉眼所見から一般に、びまん型、結節型および塊状型に分けられる。今回我々は、最終病理診断で HCC と確診された巨大血腫を内包する症例を経験したので報告する。症例は、76歳女性、1年前に肝腫瘍 (Hemangiopericytoma) の診断で、肝部分切除を受けている。夜間右季肋部痛で来院し超音波検査で肝右葉にソフトボール大の腫瘍を指摘され入院となった。臨床的に初回手術の再発と考え各種術前診断を行ない肝右葉切除術を施行した。標本割面は11×8×6cm 大の被膜に覆れた血腫であったが病理診断は、HCC であった。その後初回の標本を再検した所やはり HCC との返信であった。このように臨床診断、病理診断共に、非常に興味ある症例を報告する。

### 31. 臨床からみた HBV 感染症の経過の全貌

(国立横浜病院消化器科)

林 直諒・進藤 仁・屋代 庫人・  
久保井 宏・秋本真寿美・清水 京子

e 抗体陽性肝炎患 (キャリア、慢性肝炎、肝硬変、肝細胞癌、急性肝炎) について経過、HBV マーカー (HBV-DNA, DNA-P,  $\delta$  抗体を含む)、肝組織所見を検討し、HBV 持続感染症の経過について述べた。すなわち、成人感染における一過性急性肝炎をプロトタイプとすると、キャリアは潜伏期にあたり、血清学的には s, e 抗原陽性、HBV-DNA 等陽性 (但し anti-HBc は高い)、キャリア発症は急性肝炎の発症期にあたる (s, e 抗原陽性)。この時期は1~2カ月で、一部は慢性期に移行するが、この間すでに、e 抗体持続陽性でかつウイルス増殖を示すものもある。治療期は、正常から肝硬変、肝癌までであるが、s 抗原(-)、anti HB(-) 又は低値、となる。

### 32. 門脈圧亢進症に対する SSP の有用性

(日本医科大学第1外科)

梅原 松臣・山田 和人・鄭 淳・  
金 徳栄・田尻 孝・山下 精彦・  
恩田 昌彦

教室では昭和61年4月より scintiphoto splenopography (SSP) を導入し、門脈循環動態の解明をおこなっている。対象は未治療の門脈圧亢進症患者のうち血管撮影を施行しえた21例である。方法は柏木らの手技に準じた。柏木らの分類を適用すると、IIa型が12例と最も多かった。胃冠状静脈の描出のされ方をみると、求肝性が2例、遠肝性が15例、判定不能が4例であった。判定不能は SSP で脾静脈、門脈が描出されなかった症例であり、血管撮影にて遠肝性、求肝性がそ

れぞれ2例と判定された。また SSP と血管撮影で所見の異なる症例が2例あった。SSP はシャント率と平均通過時間の計測が可能で、治療法の選択やその効果判定にも有用である。現在まで合併症もなく、外来でも安全に施行できる検査法である。

### 33. Endoscopic varicerography による食道静脈瘤側副路の検討

(筑波大学臨床医学系外科)

近森 文夫・高瀬 靖広・小林 幸雄・  
青柳 啓之・渋谷 進・折居 和雄・  
岩崎 洋治

1981年10月~1985年9月までに当施設において内視鏡的栓塞療法施行時に、明瞭な endoscopic varicerography の得られた食道静脈瘤症例126例を対象として食道静脈瘤を介する門脈側副血行路の検討を行った。その結果、左胃静脈、噴門静脈叢、短胃静脈などの血液供給路と、食道静脈瘤以外の血液排出路である食道外シャントに大きく分類された。造影頻度は、左胃静脈52.4%、噴門静脈叢47.6%、短胃静脈8.7%、食道外シャント14.3%であった。以上から endoscopic varicerography により食道静脈瘤に関与する血行路を薬剤注入量のコントロールに必要な範囲内で十分判定しうろと思われた。

### 34. 消化器術後縫合不全例の検討

(獨協医科大学第2外科)

門脇 淳・門馬 公経・田島 芳雄

最近8年間の当教室における消化管手術後の縫合不全例を対象に主として熱型と予後につき検討した。縫合不全発生例は33例で、手術術式は胃切除10例、低位前方切除8例、胃全摘6例、その他9例であった。これらを術後の熱型により分類すると、I 解熱上昇型 (34%)、II 高熱持続型 (24%)、III 微熱持続型 (24%)、IV 高低型 (6%)、V 無熱型 (6%)、VI 低高型 (3%)、VII 解熱型 (3%) の7型に分類できた。予後はII型が最も悪く死亡率は50%であった。これらの熱型はさらに大きくII、III、IV、VI型のようにはじめから熱の持続するタイプとI、V、VII型のように無熱又は後期になって熱の出るタイプの二つに大別され、これによると、縫合不全の発生の仕方には臨床的に二つの型があることが示唆された。

### 35. ピッツバーグ大における肝移植見学記

(東京女子医大消化器センター外科)

濟陽 高穂

1986年10月、米国 Pittsburgh 大 (Starzl 教授) にて